

水島 メモリーズ

ニューリンデン編



水島のお城には歴史が詰まっている



SNSで評判
プリンアラモードとスペシャルスパ

- ▲スペシャルスパ
- ◀プリンアラモード

果物のカッティングが美しい「プリンアラモード」や、プリンを島にソーダを海に見立てた「プリンアイランドパフェ」、40年近くの看板メニュー「スペシャルスパ」。ピクニックのお城の外観と、レトロな雰囲気の内観のギャップも楽しい。倉敷・水島の喫茶店「ニューリンデン」が、SNSで話題となっています。

「今でも看板メニューのスペシャルスパはアツアツの鉄板にナポリタンと卵を流して、真ん中に卵を落とす。創業当時はなかった

目次

SNSで評判 プリンアラモードとスペシャルスパ	p3
ニューリンデンができた頃	p6
郷土史家としての活躍	p10
地域カフェとみずしま財団について	p14



プリンアイランドパフェ▶



プリンが見えないプリンアラモード



店内の様子

のですが、10年後の改装時にはあったので、もう40年間以上ずっと看板メニューですね。」と2代目のマスターである高橋芳彦さん。

このスペシャルスパは、ナポリタンとオムレツを一緒に食べられるような不思議な逸品で、おいしい上にお得な気持ちになります。

ニューリンデンといえば、400を超えるメニューと大盛り無料という特徴もあります。お子さまランチだけでも5種類、洋食だけでなくうどんなどの和食も食べることが出来ます。どんな人にも対応できるメニューがある「水島のファミリーレストラン」です。

営業時間が長く、「夜の会議の後にうどんを食べた」とか、「元気になるりたい時にニューリンデンのステーキを食べに行く」とか、「子ども頃に家族で行った」とか、水島の地域の人たちの記憶と結びついた場所ともいえます。

これらの多彩なメニューの調理を「3人でしています。妻と母親（93歳）と妹と」というからびつくりです。ホールとデザートは芳彦さんが担当しています。

フルーツのカットリングは、芳彦さんの父で、初代マスターの高橋彪さんから技術を習得したそうです。プリンアラモードは、プリンが見えないほどフルーツが満載で、さすがフルーツ王国岡山！嬉しいことにリーズナブル（650円）なことにもびつくりします。

店内の様子



フロアとデザート担当の高橋芳彦さん、厨房担当のお母さん



ニューリンデンができた頃

ニューリンデンができたのは1969（昭和44）年6月23日。水島商店街のおかみさん会によれば「1968年は水島商店街が一番もうかった時期」だそうです。現在の建物は2代目で、最初は半分の大きさの建物でした。

初代マスターの彪さん（1928（昭和3）年生まれ）は地元の福田出身。水島商店街の和菓子屋で修業したのち、広江で独立開業（現在のセブンイレブン倉敷広江店の場所）します。1962（昭和37）

年に第17回国体が岡山県で開催された際、当時の天皇后陛下が下電ホテルに宿泊され、昭和天皇が彪さんの和菓子を購入されたそうです。

この1962年は水島にとって、大きな転換点でした。新産業都市建設促進法ができ、その2年後に岡山県南が新産業都市に指定されたからです。この前後から多くの企業が進出し、水島は鉄鋼・石油化学コンビナートへと大きく変貌していきます。1961（昭和36）年7月1日には川崎製鉄株式会社（現・



二代目ニューリンデンの設計図



▲初代リンデンの外観

初代マスターの高橋彪さん▶

JFEスチール株式会社の水島製鉄所が開設され（1967（昭和42）年4月18日高炉火入れ）、同年に日本鉱業株式会社と三菱石油株式会社も水島で操業を開始しました。現在はこの2社が合併し、ENEOS株式会社となっています。

そして、株式会社化成水島（現・三菱ケミカル株式会社）が1964（昭和39）年に設立されます。化成水島は、工場建設とともに、広江に21万4500㎡の大きな社宅用地を確保し、1964年2月までに独身寮2棟（132人）、一般アパート2棟（48世帯）と購買会館を建設しました。さらにその後も拡張を続け、最終的に独身寮3棟のほか、520世帯を



広江から水島コンビナートをのぞむ。中央に見えるのが化成水島の社宅群。
その入口にニューリンデンがある。
1970(昭和45)年5月11日。安藤弘志氏撮影(倉敷市歴史資料整備室蔵)

収容するアパートを建設する計画を進めていきました(社団法人瀬戸内海経済研究センター『瀬戸内海経済レポート』第1巻第1号、1964年2月、8頁)。

化成水島の社宅から見ると、道路を挟んで南側に、現在のニューリンデンの敷地がありました。この土地は、社宅への入口に位置する角地となり、この立地が後押しとなって、田んぼだった場所です。喫茶店を営むことになったのです。「田んぼの中に店舗がポツンとあった」というのですから、現在と随分と風景が違います。

開店当初から広い駐車場を持つ店舗として営業をしていました。鷺羽山スカイラインが県内初の観

光用道路として1970(昭和45)年4月1日に開通しましたが(1995(平成7)年4月より無料開放。岡山県道393号鷺羽山公園線)、当時の賑わいはすごかったといえます。モータリゼーションを中心とした社会に切り替わろうとしていました。

1979年に現在のお城の形に改修・増築します。建物の設計も彪さんが行いました。内装や、座り心地の良いソファは当時からのものでした。

2代目マスターの芳彦さんは1959(昭和34)年生まれ。中学校の頃から店舗を手伝い、大学卒業後に調理師学校に進みニューリンデンを継ぎます。営業時間も

朝7時半から夜11時までで定休日
が月1日しかありませんでした。
現在は週1回の定休日があります
が、日本全体がモーレツな時代に、
ニューリンデンもモーレツだった
のです。



左に見えるのがニューリンデン。正面に化成水島の社宅が見える。1972(昭和47)年2月13日。
安藤弘志氏撮影(倉敷市歴史資料整備室蔵)

郷土史家としての活躍

そんなモーレツな勤務形態の中で、初代のマスター彪さんは郷土史にのめり込んでいきます。喫茶店のカウンターで調べ物をしている様子を芳彦さんは覚えていました。彪さんが世話人となり、福田史談会という郷土史の団体を1977（昭和52）年5月3日に立ち上げます。毎月研究会を開いたり、様々な伝承や歴史の地を歩いたりしていました。設立趣意書の文章の一部を紹介します。

旧福田村も往古を顧りみまするに蒼海変じて桑田の趣があり、今

日水島工業地帯の発展によりその過去は、およそ想像を超える姿に立ち到ったように存じます。あれを思い、これを考え温故知新に心を寄せる者たちが集い、子・孫たちにふるさとの歴史を身に付け、郷土愛を培うためにも、その沿革を訪ねこれを記録に留めておくことは、最も必要かつ緊急のことではないかと有志の者と語りあい、史談会を結成、研究いたしたく存じ居ります。

福田史談会の立ち上げを報じる山陽新聞（1977年5月3日倉敷圏版）



道路右手に初代ニューリンデンが見える。玉野福田線（広江二丁目交差点西方面にのぞむ）、1972（昭和47）年3月。安藤弘志氏撮影（倉敷市歴史資料整備室）



16年後の同じ場所からの写真。車中心の社会に変化している様子が見て取れる。1988（昭和63）年2月6日。安藤弘志氏撮影（倉敷市歴史資料整備室）

には旧福田村内の民生委員、老人クラブ会長、僧侶、教師ら郷土史を研究、調査している人たちが結成すると記されていました。初年度には会員56名を組織していたようです。また、倉敷新聞の福田史談会を紹介した記事（1977年5月12日）の中で彪さんは「福田地区にも歴史や伝説は豊富にあります。最近住宅の建てかえなどもめだち、先祖から伝わっている歴史書や民具なども捨てられてしまっている。残念でたまらない。いま残さなければ、古いものは消え去ってしまう古き良き物などを後世に残すこと



彪さんの書齋にて語る芳彦さん



現在の倉敷市福田歴史民俗資料館

は、現代に生きる者のつとめだと思えます。一人でも多くの人の協力をお願いしたい」とコメントしています。過去から未来に何を手渡すかを真剣に考えていた様子うかがえます。

福田史談会の活動として、倉敷市役所旧福田出張所を資料館に利用したいと署名を集め、7月12日には倉敷市議会に陳情もしています。1987(昭和62年)には現在の「倉敷市福田歴史民俗資料館」が作られています。

そして、水島の水害と戦災の記憶を記録としてまとめる中心に彪さんがいました。水害の記憶については『明治十七年暴風津波乃惨劇』(高橋彪編、千人塚百周年行事実行

を眺めた様子が残されています。

彪さんは2019(令和元)年に亡くなります。ニューリンデンの上にある書齋に所狭しと資料が残されています。遺言で「1年間はそのまま置いておいてくれと。そのあとは自分の娘、孫、あと郷土史の方に寄贈してくれと。受け取ってくれる人がいなかったら、あとは埋めてくれと。資料は史談会として集めたものではなくて、個人的に収集したものだから個人のものだ」と言い残していたそうです。

ニューリンデンは、変わりゆく福田で生き、地域の歴史を伝えていこうとした、初代マスターの土地に対する深い愛着が詰まっている場所でした。

委員会、1986年)がまとめられました。後書きの代わりになる「記念誌」の項は、「いつの日か『福田新開の暴風津波』の研究が取り上げられる時へ千人塚に眠る精霊の生命がそこよみがえるのである。このへ郷土史への研究が続く限り、福田の地に骨を埋めた祖先の生命は生き続けるのである」と締め括られています。

『水島の戦災』(倉敷市、1986年)には彪さんの経歴談が掲載されています。勤労動員で倉敷工業(倉敷紡績)の万寿工場(現・アイビスクエア)にいたとき、B29が襲来する中でも操業を止めないよう空襲警報がならされなかったという話や、水島空襲を広江の自宅からグラマン機の軌跡

福田史談会は水島の歴史を書き残しています



地域カフェについて

岡山県倉敷市の中にある水島地域は、日本有数の鉄鋼・石油のコンビナートを有している地域ですが、江戸時代の新田干拓によって作られた農村でもあり、瀬戸内海の豊かな海に養われた漁場を有していることから漁業の文化もある、日本近代の色々な歴史が詰まった魅力的な場所です。そんな水島地域の新しい魅力を探し出すのが「みずしま地域カフェ」です。「水島メモリーズ」はみずしま地域カフェで集めた情報をもとに構成しています。

水島地域の「ワクワク」をお伝えできればと考えています。

みずしま財団について

みずしま財団は、正式名称を「公益財団法人水島地域環境再生財団」といい、2000年3月に、水島地域の環境再生・まちづくりの拠点として設立されました。住民を主体に、行政・企業など水島地域の様々な関係者と専門家が協働する拠点として、よりよい生活環境を創造する活動を展開していくために調査活動をはじめ、学びの場づくり、人とのつながりづくり、そして公害の経験の継承と公害患者支援などを行っています。

DATA



文：林美帆（みずしま財団）
デザイン：山口百香（Myu dear,）

2021年11月

発行：公益財団法人水島地域環境再生財団
地球環境基金の助成を受けて制作しました





水島メモリーズ
メニュー

水島メモリーズ
メニュー

水島
メモリーズ